

# 苦難と運命の『赤煉瓦』

## 全道庁文芸誌66年の歩み

全道庁労連政策情報室

井上昭弘

### 「読者会」から「赤煉瓦」創刊へ

全道庁の文芸誌『赤煉瓦』は、今秋（二〇二二年）

第51号を発行した。創作をはじめ、回想、随筆、紀行、詩、短歌、俳句、川柳、絵画・写真など多彩な分野に退職者を含む三三人が寄稿、A5版、約一三〇頁に収まっている。創刊は戦後間もない一九四六（昭二一）年七月、同年五月には全道庁が結成された。光陰矢の如し、実に六六年という歳月が流れている。『赤煉瓦』は休刊と復刊を繰り返してきたが、それは全道庁史と表裏の関係にある。『赤煉瓦』の生みの親である元全道庁書記長の高橋実の自伝を座標にその歩みを概観する。

『赤煉瓦』はどのようにして創刊したのか。その源流は一九四五年の暮れに生まれた「北海道庁読書会」にさかのぼる。この会に集まった若い道職員がやがて青年部を作り、全道庁結成へ動いていく。その中心にはのちに全道庁書記長となる二六歳の高橋実がいた。復員して道庁（行政事務室）に戻った彼は「何をなすにもまず本を読むこ

と」だと考え「読書会」を立ち上げた。高橋がつくった呼びかけ文を人事課にいた山崎昇（のち全道庁委員長、参議院議員）が毛筆で模造紙に清書し、庁内に張り出した。

「読書会」の機関紙『いずみ』創刊号の巻頭言に高橋は「あわただしい世相に：真を極め、美を愛し、善にあくがれる、若い人のみが持つ純粋さをもって対処したい」「本を読むことが青年を真正の知識人たらしめ、ひいては新しき日本が要望する文化人たらしめる」と書いた。「読書会」の会員は三カ月ほどで三〇〇人に達し、やがて蔵書も増え続けて「全道庁文庫」となり、道職員厚生課に引き継がれ本庁、支庁の図書室に発展している。「読書会」に集う青年の純粋で文化を追求する活動が母体となって全道庁青年部ができる。青年部には文化研究科という部署が設けられ、主として「読書会」を運営しつつ、講演会、音楽会、演劇会などを手がけ、そして文芸誌の出版が活動に掲げられていた。

全道庁が全道を網羅した組織となるのは一九四六年五月結成の全北海道庁職員組合連合会であ

り、これが全道庁の出発である。初代委員長は北海道初の民選知事となる田中敏文で、大会宣言は「北海道庁の民主化を実現し、民主主義新日本建設の一翼を担わせん」と謳った。全道庁執行部に文化部が設置され、部長は芦田勇であった。芦田は田中委員長が知事となったことで二代目の全道庁委員長となる。彼は横路孝弘元道知事の父・節雄（衆議院議員）とは札幌師範学校同期生だ。「算数の横路、国漢の芦田」と称された秀才だったといわれている。高橋はこの文化部の部員となり、さつそく青年部結成以来の夢であった文芸誌の発行に奔走する。

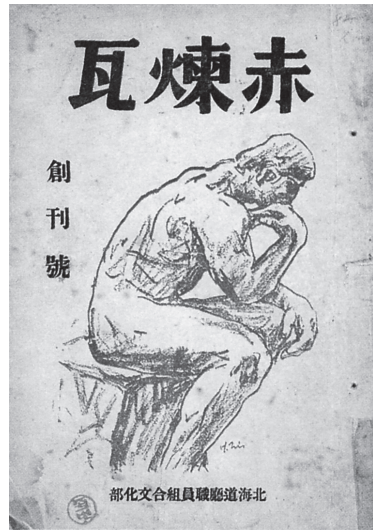
### 活字と明日の光を求めていた時代

創刊号には二二人が寄稿、ほとんどが三〇歳未満の青年だった。三三頁、頒価一円五〇銭。印刷部数ははつきりわかっていない。表紙絵は高橋の兄が描いたロダンの考える人のスケッチが飾った（写真）。原稿募集から編集までほとんど高橋一人で行い、印刷は道庁地下の印刷所に頼んだ。活字に飢えていた時代だったので飛ぶように売れたという。組合からの補助はなく、売上金は印刷所に謝礼として渡した。『赤煉瓦』という誌名は全道庁の前身である職員組合が発行していた機関紙『雑報赤煉瓦』に由来し、高橋が採用した。

「創刊の辞」で文化部長の芦田は、「我々は苦屋に忘れられた舟を引出し、一日も早く帆を張って明るい日本の光を目指して舟出ししなければならぬ。その舟は北海道庁職員組合、その光は民衆官

## 【創刊号】

一九四六年(昭和二十一年)七月発行  
一紙・カット 西田秀雄・高橋秀吉



庁の樹立である。その面舵をとるべき使命を帯びて慈に文芸誌『赤煉瓦』が誕生した」と書いた。のちに北海道新聞社に転身したあと、隔月刊誌『北の話』編集長で道新にコラムを書くことになる長官官房文書課勤務の八重樫實は「赤煉瓦」と題した詩を寄せた。

「…青い鳥を 求めに 道庁の 厳しい門を 潜った」 「赤煉瓦 文書課 毎日 訪れる 公書の 封筒を 搔ツ裂いて…紙屑箱に投じてみる」 「他人を 幸福に してやれば 自身の幸福も見いだせるに 違いない…」と詠った。高橋も緒田治二というペンネームで創作を書いた。

一九四七年五月発行の第4号は爆発的に売れたという。『赤煉瓦』は創刊から富貴堂など札幌市内の書店にも並び、のちに全道庁書記長となる中川熊蔵が書いた短編小説「る・ぷるうる」が人気

を呼び注文が殺到、増刷した。夫婦となって四年余、結核で余命幾ばくもない妻との心の交流を描いたこの作品は、作家の中野重治が来札した際に「感心」を示したとの逸話もある。

## ゼネスト中止と「レッドパーシ」の風

一九四八年六月発行の第6号に開拓部開発課の橋崎政が、戦中、東京から北海道十勝へ集団入植した夫婦の苦悩を描いた創作「思慕に就いて」を発表する。彼は開拓部の技術者だったがのちに北海道新聞社の社会部(のち学芸部)へ転身し創作活動を続け、北海道新聞社から『橋崎政創作選集』(七七年)が出版されている。

一九四七年一月三十一日、「二・一ゼネスト」中止の夜、組合の黒板に書かれた闘争詩「嵐は樹を強くする」は、青年行動隊だった橋崎の作である。語り継がれるこの闘争詩は、いままも全道庁委員長室に掲げられている。

『赤煉瓦』は一九四九年の第7号まで順調に発行されるが、同年九月一日、突然の悲劇が全道庁を襲う。GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)が下した労働運動からの左翼勢力の排除「レッドパーシ」であった。道庁では五六人に対し首切り解雇が通告され、全道庁執行部二〇人中一二人が含まれていた。田中知事実現の原動力だったかつての同志・全道庁三役を知事自身が追放したのだった。このとき、全道庁書記長だった高橋は、後志管内余市町で開催された臨時大会で執行部不信任案が可決されたため、組合からも追放される

事態に発展した。

高橋をはじめとする『赤煉瓦』創刊以来の有力メンバーのほとんどが道庁を去って行った。高橋の後を継ぎ第2号から編集に携わっていた前出の八重樫も転出していった。『赤煉瓦』の発行は中断を余儀なくされたが、創刊以来の残された編集経験者を軸に一九五三年、第9号で復刊を果たす。新たな書き手を加え、印刷費は組合の会計に計上され、全道庁本部教宣部の態勢も整えた。廃刊の危機を乗り越えた『赤煉瓦』は六二年の第20号までの約一〇年間継続していく。

この時期の『赤煉瓦』は文芸誌からの性格を変えている。例えば一九五三年第9号にはのちに自治労本部委員長となる丸山康雄が全道庁給与対策部長として「われわれの給与」を書き、五六年第12号では総評副議長の太田薫が「賃金行動綱領を



高橋(中央上)が書記長時代の全道庁書記局(1949年6月道庁前庭)

めぐって」を寄稿している。また「自治体労働者の階級闘争」を巡っての誌上論争も繰り広げられ、組合の機関誌的な側面が強くなった。「赤煉瓦」を純粋な文芸誌とするのか、機関誌とするのか今も古くて新しい課題である。

一方で、優れた書き手も現れる。一九五五年第11号に発表し、のちに道立美術館の初代館長となる工藤欣彌の創作「びえる物語」が注目され、この年の「北海道文学代表作選（昭和）三〇年版」に掲載された。

道庁を追われた高橋はその後、林務部に復職を果たす。高橋は第9号から11号に「憶い出」と題して復員から「読書会」、田中知事実現までの自分と全道庁のことを回想した。そして辛かった首切り解雇、復職までのいきさつを加筆して一九六一年、「皆が苦勞したとき 私も苦勞した話」という長いタイトルをつけた一冊の本にまとめた。この書は全道庁草創期の証言としても貴重である。

### 再び休刊そして復刊へ「人間復権」 高橋実さんを偲んで

一九六二年、全道庁、町村連、都市連の三者が統合して自治労北海道本部がスタートする。機関紙「全道庁」は四七一号で終刊、「自治労北海道」として再出発する。統合で全道庁本部教宣部も廃止されたため、文芸誌「赤煉瓦」の編集発行機能も失われ、第20号をもって再び途絶えてしまう。労働運動は春闘がはじまり全道庁は公務員賃金

闘争を全面的に展開する。処分覚悟でストライキにも突入、不当処分反対の裁判も闘う。こうして組合運動に占める文化の領域が狭まりはじめた。だが、職場では文化活動が息づいていた。留萌支庁では職場の親睦会が会報「オロロン」を発行、渡島支庁の文芸サークルは「ほり」という会報を出し続けていた。上川のエッセイ試験場には「にじりん」という文芸誌が活動し、札幌では本庁の若い職員有志による作品集「道庁文化」が生まれた。

このように各職場の継続した活動があつて、一九七五年、全道庁の組織強化長期計画の一環として「赤煉瓦」第21号が復刊する（写真）。六二年の第20号から実に一三年ぶりだった。巻頭言で森尾昇全道庁委員長は「避る人間復権の職場文芸」と題し、「労働者の手による文学はまさに人間復権という点で労働運動と軌を一にしている」「赤



第21号（復刊第1号）  
一九七五年（昭和五十年）八月発行  
〈表紙絵・高橋欣也、題字・藤原義弘〉

煉瓦」は何にも代えがたき自治労全道庁の人間性復活のパロメーターとなるであろう」と述べた。そして「赤煉瓦」がいくたびかピンチになった時、その流れを継承しようとする職場文芸活動が絶えなかったことを強調した。

復刊を成し遂げた「赤煉瓦」は順調に発行を重ねるが三度目の転機が訪れ、発行が中断する。堂垣内保守道政の矢継ぎ早の合理化攻撃との総力戦となる対決を経て、「未知との遭遇」となった一九八三年の横路道政の誕生は全道庁の今後の行方を左右する大きな出来事だった。復刊以来の本部担当者の交代やベテラン編集委員が他界したことも重なった。全道庁は一四総支部代表者を編集委員に加えるなど新たな試みでもう一度編集態勢を整備する。

こうして一九九〇年には「赤煉瓦」第30号記念号を発行する。以後休むことなく年一回発行し、二〇一二年第51号まで続いている。「赤煉瓦」を創刊した高橋は「サヨナラダケガ人生ダ」という自身の葬式のシナリオを第30号に発表した。お経はあげない。代わりにモーツァルトの交響曲第四〇番を式場に流す。献花の後は車座になって焼酎を飲んでもらう。高橋は九六年、七六歳でこの世を去った。葬儀は「シナリオ」どおりだった。第35号は「赤煉瓦」の生みの親である高橋実追悼号となった。私も寄稿し「赤煉瓦」とともに歩んだ運命の高橋を偲んだ。（文中、敬称略）

へいのうえ あきひろ